

2018/11/5 卒業論文最終発表

## 「吉田流数寄屋」と「村野流和風建築」―村野藤吾の四つの論文を事例に見る両者の対照性―

中谷礼仁研究室 千年村研究ゼミ/The believersゼミ所属 1X15A115-1 中下桂

## 目次構成

<b>【序論】</b>
第1章 本研究について <p>1-1.はじめに</p> 1-2.研究目的と研究方法 1-3.本論文の位置づけと構成 1-4.既往研究
<b>【本論】</b>
第2章 数寄屋の発生 <p>2-1.茶室の始まりから草庵茶室まで</p> 2-2.千利休 2-3.木割
第3章 吉田五十八 <p>3-1.モダニズムに浸透された時代と吉田五十八</p> 3-2.自著から見た吉田五十八 3-3.吉田と近代建築 3-4.小結
第4章 村野藤吾 <p>4-1.村野藤吾</p> 4-2.自著から見る村野藤吾 4-3.村野藤吾とモダニズム 4-4.小結
第5章 村野藤吾が吉田五十八について書いた四つの論文 <p>5-1.村野藤吾が書いた四つの論文について</p> 5-2.四つの論文 5-3.村野藤吾から見た吉田五十八 5-4.小結
第6章 考察 <p>6-1.様式化と普遍性</p> 6-2.「吉田流」と生み出された垂流について 6-3.吉田と職人の関わり方
第7章 結論 <p>7-1.結論：「吉田流数寄屋」と「村野流和風建築」</p> 7-2.謝辞 7-3.参考文献 <p>7-3-1.一次資料</p> 7-3-2.参考文献 7-4.図版出典

## 本論

## 第2章 近代以前の数寄屋

### 2-1.茶室の始まりから草庵茶室まで

茶を飲むという行為は、平安の昔から行われていたことであった。その中で茶礼という作法が生まれたのは、鎌倉時代後期のことで、禪院の寺院において、日常生活の一環として飲茶が飲まれていたことから始まっている。つまり、茶の湯の源流には禪宗が深く関わっていることになる。

この豪華な茶の湯に反抗した人物として、村田珠光がいる。珠光は良い道具を持った上で、その道具の味わいを深く知る必要があることを説いた。この珠光流は、その後武田紹鷗によって侘び数寄との親和の道を開く。紹鷗は侘びの理念を以って、室内で茶を点てるというプロセスを行った人物である。しかし紹鷗は最初から侘び数寄の茶に入ったわけではなく、はじめはむしろ珠光の流れを引き継ぎ、その流れの中で完成への道を歩んだ人物だった。しかしその紹鷗でも無視出来ないほどに、当時の侘び数寄の魅力は輝いていたのだ。

### 2-2.千利休

現代で茶室を語る上で、千利休は避けては通れない道だろう。彼の考案した全く新しい茶室は大流行し、その後長らく続いていくものとなっている。それまで流行していた紹鷗の四畳半やそれ以外の茶室の流れを、利休の茶室はいつぱんに変えてしまったのである。彼は若年の頃から茶に触れ、この時代に茶の第一人者であった紹鷗に直接師事し、そうして天下人の秀吉に仕えながらも、最期は茶の席でその生涯を閉じている。言ってしまうえば、彼はその生を茶に捧げていたのである。利休の作とされる茶室で唯一現存する待庵は二畳間である。それまでの時代では全ての茶を志す人は四畳半の座敷を作るもので、それより小さな茶座敷を持つ人は、茶道具を持たない、哀れな人であった。しかし利休が革新的に四畳半を破ったことで、この後も小さな茶座敷が作られていく。また利休が侘びを表現するための様々な工夫が、一見簡素に見える茶室には凝らされている。

### 2-3.木割

数寄屋を学んで行くと、その中で木割という言葉を見つける。木割とは、建築を構成する各要素の比例関係のことを言い、柱間の寸法、柱の太さを基準の寸法として、定められた比率に従って他の要素の寸法を順次決定して行くという手順で数寄屋建築は作られている。つまり数寄屋の空間に存在するあらゆる線、あるいは平面は、定められた比率の元に決定されているのである。この設計方法は木割術として近世に定式化されている。この木割術は長く浸透し、数寄屋建築を嗜むものなら当然知るべき常識となったが、この比例関係によって固められた寸法による空間は、近代で吉田五十八に数寄屋の限界を感じさせる要素の原因ともなった。

## 第3章 吉田五十八

### 3-1.モダニズムに浸透された時代と吉田五十八

18世紀後半にイギリスで始まった産業革命は、様々な分野に影響を及ぼした。それは建築界も例外ではない。産業革命によって工業力は格段に跳ね上がり、それによって建築に使われる材も一新されていった。それまでの時間的、経済的コストが爆発的に変化したこの時代で、とある様式が出てくる。それが近代建築の、モダニズムと呼ばれるものである。吉田五十八はその時代で数寄屋に向き合うことになった。

#### 3-2.自著から見た吉田五十八

ここでは、吉田の自著から彼の特徴を読み取っていく。これについて、以下の三つのトピックに分けている。
①建築と依頼主の関係
ここで吉田は建築は条件がなければ建てられないことを述べ、施主との対話を重要視していたことを述べている。
②素人と玄人、氏と育ち
ここでは吉田が玄人は「慣れ」が禁物であると述べていたことを記している。また、吉田は「氏より育ち」ではなく「氏と育ち」であると述べ、育った環境も大事だが、生まれ持った性質も重要視していたことを述べている。
③和風の生活から洋風の生活へ
洋風化する生活で、吉田は畳から椅子での生活の変化、着物からワンピースの生活の変化を指摘している。室内での生活がワンピースのように明朗なのだから、生活の場である数寄屋も、無駄な線を消して明朗化されるべきであると吉田は述べていた。

#### 3-3.吉田と近代建築

前述したように、吉田が生きた時代はモダニズムの到来の時代でもあった。モダニズムの建築性は、近世以前の数寄屋とはおよそ相入れないものであった。日本には数寄屋とは全く別にモダニズム的建築がつくられるようになっていった。しかし、モダニズムが流行して時間が経つと、当時の日本では所謂日本趣味を求める人が多く出て来た。これは吉田も述べていた事である。一度入って来たモダニズムのおかげで、人々は椅子で過ごしたいと思うし、冷暖房によって快適に過ごしたいとも思う。吉田五十八は、この要望を結合した。モダニズムによる世界を、数寄屋の中に落とし込んだのだ。吉田は建築について、内部の人間が過ごしやすいと思うものを建てるべきであると述べている。内部の人間が近世以前と変わったのだから、吉田の数寄屋がそれまでの数寄屋と異なるのも、考えてみれば当然のことなのかもしれない。

#### 3-4.小結

吉田は数寄屋建築を、モダニズムを含みながらも、海外のモダニズム建築の影響を受けない、海外から脱却した日本オリジナルの建築として目指していた。この新興数寄屋、改め「吉田流」数寄屋は、その後日本中に広まり、長く続いていくものとなる。

## 序論

### 1-1：はじめに

現代では当然のように洋室の隣に和室が存在するが、当然ながら建築に洋風化の流れが来る近代以前は洋室と和室の併存などあり得なかった。人々は当然のように畳の上で暮らしていたし、また、擬洋風建築が流行してからもその中に敢えて畳が入ることはなく、むしろ和風の要素が入ることは時代遅れのものだと認識されるくらいであった。この洋風建築と和風建築が同時に存在しつつも完全な混じり合いを見せなかった時代で、敢えて和風建築の象徴である数寄屋建築に向き合った建築家として、村野藤吾と吉田五十八が挙げられる。彼らは殆ど同時期に生きて建築家として名を馳せておきながら、数寄屋建築に対する見解は対照的と言われている。本研究では、それまでの数寄屋建築の流れを述べた上で、村野と吉田の数寄屋への受け取り方を調べ、現代なお評価される彼らの対照性を具体的に読み解いて見ていく。

### 1-2：研究目的と方法

本研究では、村野藤吾が吉田五十八に宛てた四編の論文を読み解き、村野が見た吉田五十八の数寄屋と、それについて村野が感じた自身との対照性を考察し、それによって両者の対照性を見ることを目的とする。この四編は、それぞれ共通することもありながら、それぞれに村野の思考と吉田の建築に対する想いが述べられている。これらを読み解くことにより、村野が吉田に対し異なると感じていた点を具体的に述べ、同時代にいた彼らの数寄屋に対する姿勢の対照性を調べていく。

### 1-3：本論文の位置付けと構成

本研究では、主に近代数寄屋を扱う。ここで扱われている近代数寄屋は、必ずしも茶室をする場ではなく、むしろ当時の日本を代表とする住宅、あるいは商業施設としての建物である。そのため、ここでは数寄屋を、日本的な住宅、あるいは建物として定義する。その元になる建物として茶室を扱っていく。構成は下図の通りである。

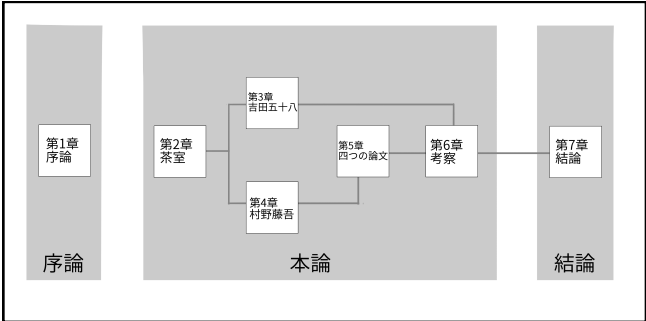


図1：論文構成



## 第4章 村野藤吾

### 4-1：村野藤吾

東京に拠点を置いていた吉田に対し、村野は大学時代以外は基本的に関西に主要な生活拠点を置いている。

### 4-2.自著から見る村野藤吾

ここでは、村野の自著から彼の特徴を読み取っていく。これについて、以下の三つのトピックに分けている。

①時代に浸透する科学について

近代科学が新しい事実を次々に生み出し、それによって様々な思考が生み出される時代はまさしく変化の時代であった。先に事実が生まれ、それによって思想が生み出される状態である。村野はこの時代の真理が変化の過程にあると述べ、その真理を目的に転化させる必要があることを述べた。

②建築と経済の相互関係

村野は建築について、建築家は意匠性だけでなく経済性も考慮すべきだと主張していた。

また彼は建築の「構造的生命」と「営利的生命」の二つの寿命を挙げ、未来を見据えた上での設計を主張していた。

③私流の和風建築

村野は数奇屋の材料が高価になるなどして、実質つくることが難しくなっている現状を述べ、新しい素材を用いて「私流和風建築」をつくっていると述べている。ここで村野はこの日本風の範囲を広げる際の職人の重要性を述べている。

④施主との対談

村野は施主からしっかりと要望を聞いた上で、決して村野の建築であると驕らずに設計に努めていた。

### 4-3.村野藤吾とモダニズム

それ以前の建築の全てを過去のものとし、世界共通の新しい建築として提唱されたモダニズムだが、目的のない転生と刹那的な変化からは、永久的な神のようなものは出来ないと述べモダニズムの絶対性を否定するような文章を述べている。

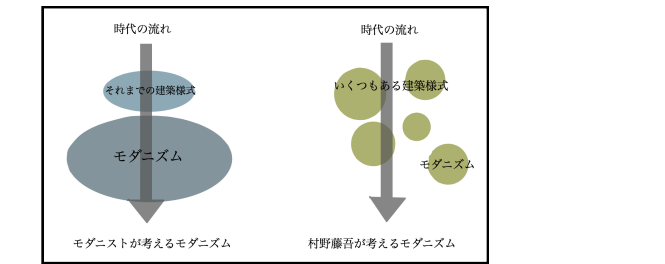


図2：村野藤吾の考えるモダニズム様式

### 4-4.小結

数奇屋において、彼はしばしば、自らが数奇屋についてそう勉強しているわけではないことを述べていた。彼は経済的にも昔からの数奇屋の実現の困難さを述べ、そうして近代建築の材料を使う代わりに、それによって日本風の範疇を広げてしまうことになるので、自らの建築を「私流和風建築」と述べていた。彼は鑑賞と知ることの明らかな違いを述べ、数奇屋建築家を名乗らなかつた。

## 第5章 村野藤吾が吉田五十八について書いた四つの論文

### 5-1.村野藤吾が書いた四つの論文について

四つの論文についてそれぞれ述べていく。「吉田流」（『新建築』昭和四十九年五月号、1974年）「吉田五十八氏の作品作風」（『建築士』昭和四十九年十月号、1974年）

「吉田流私見-吉田五十八氏の一周忌を迎えて-」（『建築雑誌』昭和五十年三月号、1975年）

「温故知新-吉田五十八作品集に向けて」（『吉田五十八作品集』新建築社、1977年）

### 5-3.村野藤吾から見た吉田五十八

①様式のようなものだった数奇屋から近代数奇屋への様式化
それまで感性による不定形の「様式のようなもの」だった数奇屋が、吉田五十八の数奇屋によって、「吉田流」という様式を生み出した。

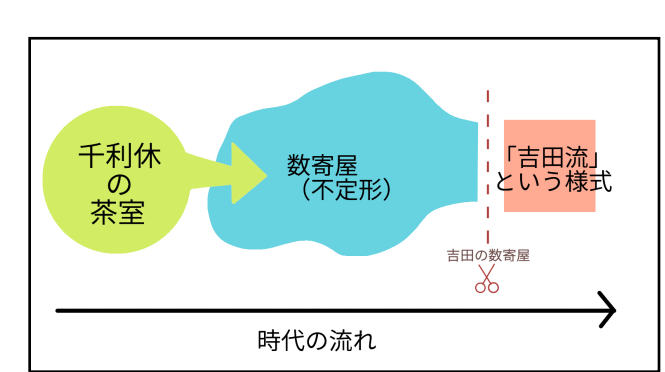


図3：様式化した「吉田流」

②吉田がつくりだした「吉田流」と亜流となった「吉田流」
ここでは二種類の「吉田流」について説明している。吉田の「体質」は、吉田の氏と育ちによる結果であり、吉田自身抜け出すことの出来ない、彼だけの領域であった。様式化した「吉田流」に、吉田五十八自身の「体質」は存在しない。故に吉田以外の全ての「吉田流」は亜流となる。

③吉田と職人の関わり方

村野曰く、東京の職人の仕事ぶりは見事なものであるが、これは修練さえ積みば代替可能な単位化されたものであった。それまでの数奇屋職人のように「個」の味が出るのではなく、経済用語で言う、労働量、すなわち、近代技術となっていた。そうして村野は、この職人について、吉田の影響が色濃く出ていることを述べている。

吉田五十八の作り出した、村野の言葉を借りるならば潔癖で純粋な数奇屋は、その細部までが作り込まれたものである。その完璧さは、最早職人の「個」の色を出す遊びの余地を残していなかった。

村野はこの職人による色こそ数奇屋の価値の出所のように捉えていた。

## 第6章 考察

### 6-1.様式化と普遍性

吉田は住み手の居心地の良さを重視した建築を意識してつくっていた。

吉田の依頼主たちは、全員が全員、村野のいう「通人」ではないだろう。そうすると、彼らにも理解してもらうためには、予めある程度の普遍性が必要だったのではないかと考えられる。また吉田は時代に即するためにそれまでの数奇屋とは違う、近代に即した数奇屋の提唱をしようとした。この新鮮な変化は、それを全て理解できるか否に関わらず、変化を万人が感じさせるものであった。対して村野は、自著で以下のように述べている。

▼時おり、私の仕事を村野数奇屋と呼ぶ人がある。とんでもないことで、私にそんなものができるはずがない。依頼者あつての設計であるから、勝手にできるわけがない。依頼者の意向に添うことは当然であるが、しかし先方の意向に添い、また十分に話し合いができて納得ずくで設計しても、村野に頼んだ以上最後のパーセントは村野が残る。そのパーセントが、ときとして全体に影響を及ぼすかもしれないので、いくら慎重であっても慎重すぎるということはないと思う。（「和風建築について」村野藤吾『村野藤吾和風建築集』昭和五十三年五月刊）

村野にとって、数奇屋は普遍性とは相反するものであった。それを踏まえた上での設計が、村野の仕事だったのだ。

### 6-2.「吉田流」と生み出された亜流について

吉田五十八が書いた「氏と育ち」の文章については、村野も言葉を借りている。建築家、あるいは吉田五十八が、その出生と育った環境の両方があったからこそ「吉田流」の数奇屋を生み出したことは、吉田、村野が共に認めるところである。吉田の亜流については、吉田の生前から既に数多くあった。吉田は自らの作風の亜流について、以下のように述べている。

▼昔から『偽物は、その作者の作品を永久に保存してくれる』という言葉がある。或は、この言葉通り、私の作風は将来建築様式として、永久に伝えられるかも知れないが、永い間にだんだんと、間違つて伝えられ、半世紀もしたら、とてつもないものが、これが吉田の作風だと伝えられるかも知れない。これは設計者としては、迷惑至極であるが、建築に著作権のない、今の世の中では、どうにもしようのない話であつて、これが、建築の宿命と言うのかもしれない。（「数奇屋偽物物語」吉田五十八『文芸春秋』昭和四十年二月号）

村野は自著で、当時の建築で、コルビジェの影響が抜けない作品について指摘している。（＊1）真新しく合理的なコルビジェの作品は、日本でも多く模倣された。コルビジェの建築が世界中で多く模倣されたように、「吉田流数奇屋」も、吉田の手を離れ、多く模倣された、様式としての「吉田流数奇屋」となってしまった。これが宿命だと述べる吉田の言葉と、「吉田流数奇屋」から現代数奇屋が生まれたことを歴史の一頁だと述べる村野の言葉（＊2）は、同義のものだろう。

### 6-3.吉田と職人の関わり方

上記したように、吉田の建築は、数奇屋という存在と近代性に通じる普遍性の両立した、新しく合理的な建築であった。吉田は自らの考える近代に即した数寄屋の実現のために妥協しなかつた。

この吉田の細部までこだわり抜いた潔癖さが、結果的に職人の余地を殺してしまったということになる。そうしてその性質は、吉田の手を離れた亜流としての「吉田流」にも引き継がれていったのだろう。

## 第7章 結論

まず「吉田流数寄屋」だが、これは、吉田がつくり上げた新しい数寄屋である「吉田流」と、その後に亜流として伝わっていった様式としての「吉田流」がある。

前者の「吉田流」は、吉田にしか持ち得ない体質の上に、近代生活に求められた数寄屋を作るという思想を通し、内部で暮らす人が居心地良く感じることを前提として作られた、細部まで計算し尽くされた建築である。その「吉田流」がそれまでの数寄屋の外見や特徴と異なっているても、吉田にとってその建築は数寄屋であった。吉田にとっての建築は、外観で定義されるものではなかつた。

しかしその後に亜流として広まった「吉田流」は、吉田以外が作ったことにより、吉田が作ったということによる吉田の体質という核を失っている。しかし計算されたディテールと、近代技術の労働力は、その形を様式として捉え、広めていった。これにより、吉田の建築であった「吉田流」は、現代数奇屋としての様式に昇華していった。

対して村野は、自身の数奇屋のことを「私流和風建築」とあると述べている。これは彼にとって、数奇屋が、吉田が取り扱った外見、特徴をも含んだものだったということになる。彼の価値観で言うならば、吉田本人が作った「吉田流数寄屋」は、数奇屋ではなく和風建築であり、亜流の流行から様式となった「吉田流」は、もはや日本建築の範囲を押し広げ、乗り越え、和風建築でもない新たなものとして捉えていたかもしれない。

村野は吉田が自身より数寄屋について学んでいたことを認めていた。数寄屋をよく学んだ彼が、近代生活にひたむきに向き合った結果に殺すことになったもののことを、村野はなかつたことにしたくはなかつたのだろう。

## 図版出典・註釈・一次資料

▼図版出典
図1-3：筆者作成
▼註釈
＊1：「審査」村野藤吾『建築雑誌』昭和二十三年八月号
＊2：「吉田流私見-吉田五十八氏の一周忌を迎えて-」（『建築雑誌』昭和五十年三月号、1975年
▼一次資料、引用文献
村野藤吾（1974年）「吉田流」『新建築』昭和四十九年五月号
村野藤吾（1974年）「吉田五十八氏の作品作風」、『建築士』昭和四十九年十月号、村野藤吾（1975年）「吉田流私見-吉田五十八氏の一周忌を迎えて-」、『建築雑誌』昭和五十年三月号
村野藤吾（1977年）「温故知新-吉田五十八作品集に向けて」、『吉田五十八作品集』新建築社
村野藤吾（1978年）「和風建築について」、『村野藤吾和風建築集』昭和五十三年五月刊
吉田五十八（1965年）「数奇屋偽物物語」、『文芸春愁』昭和四十年二月号